

■ 学校の共通目標

【HP公開用・様式1】

授業作り	重 点	個に応じた指導を取り入れ、一人一人の「生きる力」を育む質の高い授業作りをしていく。 具体的には、 ・見通しをもち、既習事項を生かしながら、児童が主体的に取り組めるような授業構成を工夫する。 ・一人一人の力に合わせた基礎的学習にタブレット端末を活用したり、友達の様々な考え方を通して協働的に学ぶ場面を設定したりし、児童が主体的に学び、学ぶことを楽しめる授業を行う。また適宜ICT機器を活用する。
環境作り		多様性を認め合い、共に学び合うことができる環境作りをしていく。 具体的には、 ・児童の個性を大切にし、互いの違いを認め合いながら、多様な考えの交流ができる学級環境をつくる。 ・ICT機器の活用と共に、書くことや話すことなどの言語活動や、実際の体験を通して学ぶことを大切に考えたカリキュラム・マネジメントを行う。

■ 学年の取組について

学 年	学習状況の分析 (各種調査から)	学校が取り組む目標 (日常の授業の様子から)	目標達成のための取組
1 学 年		<ul style="list-style-type: none"> <li>話し手のほうを見て、最後まで静かに話を聞く力を身に付ける。</li> <li>伝えたいことを明確にした文章を既習の漢字も用いながら書く力を身に付ける。</li> <li>片仮名で書く言葉、平仮名で書く言葉を区別しながら表記する力を身に付ける。</li> <li>繰り上がりのある計算は、10のまとまりを考えながら暗算で答えを出す力を身に付ける。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 話をする前に必ず体を向ける指示を出し、話の後は質問をする時間を設ける。</li> <li>② 書き方の定型文を提示する。</li> <li>③ 日々の宿題を中心に片仮名で書く言葉を確認する。</li> <li>④ 毎日の計算カードの宿題で、繰り返し計算練習に取り組ませる。</li> </ol>
2 学 年		<ul style="list-style-type: none"> <li>大切なことに気を付けて話を聞いたり、分かるように話したりする力を身につける。</li> <li>既習漢字を文章の中で正しく使って書く。</li> <li>人の話を受けて質問したり考えたりする。</li> <li>正確に筆算をする。</li> <li>九九を確実に覚え、生活に結び付けながら使えるようにする。</li> <li>長さやかさの単位を理解し正しく使えるようにする。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 日々の授業の中で、意図的に話したり聞いたりする機会を多く設定し、話し方聞き方のポイントを継続して指導する。</li> <li>② 定期的な漢字テストの実施と既習漢字を使った文を書く機会を設定する。</li> <li>③ プリントとタブレット学習で反復練習を行い定着を図る。</li> </ol>
3 学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>論理的な文章への取組に課題がある。</li> <li>漢字の定着率にも課題があり、家庭学習とも連携して進めていく必要がある。</li> <li>グループでの発表活動は意欲的に取り組み、児童同士が意見交換をしたり、話型を教え合ったりする協働的な姿が見られる。</li> <li>学力定着度調査の結果から、2教科とも全国平均を上回っていたが、国語の書くことに苦手意識が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童自身が自己の考え方・感じ方を表現できるようにする。その一環として文章表現を身に付ける。</li> <li>毎日の漢字の取り組みをする習慣付けをする。</li> <li>毎日の授業で意図的に組んだグループで、児童同士が互いに良い発想や考えを伝えやすいように授業の内容や環境設定を工夫する。</li> <li>国語の授業の中だけでなく、朝の会で自分の調べたこと・興味あることを発表させたり、他教科でも学習して考えたこと、感じたことをまとめたりする。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 様々な文章に触れさせる。友達の良い表現を紹介し、真似させる。児童によっては視写をさせる。</li> <li>② 適宜、ミニテストを行い、習熟の度合いを図る。児童の理解に合わせて反復練習の機会を増やす。</li> <li>③ 学習のめあてを理解した上で適切なグループワークを取り入れる。よい発想・考えをした児童の発言を拾って、全体に積極的に広げていくことを続けていく。</li> </ol>
4 学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習の漢字を文章の中で使うことが困難な児童が多い。</li> <li>事象に対して、理由を具体的に表すことが苦手な児童が多い。</li> <li>作図を苦手とする児童が多い。</li> <li>三位数÷一位数などを苦手とする児童が多く、基本的な計算問題の習熟度に差が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章を書く際にタブレット端末や漢字辞典を活用し、既習漢字を文章の中で使えるようにする。</li> <li>具体的に表現できるようにする。</li> <li>デジタルドリルや計算ドリルを活用して、繰り返し問題を解く。</li> <li>習熟度に応じて学習の仕方を選択できるようにし、基礎的な知識技能の習得と意欲向上を図る。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 定期的な漢字テストの実施。</li> <li>② 国語辞典や漢字辞典の活用する場面を設定する。</li> <li>③ 普段から定規を使うなど、用具に慣れさせる。また、ドリルを活用し、繰り返し問題を解く。</li> <li>④ 習熟度に応じた授業の設定。単元毎に自己のレベルに応じた授業を選ぶことで、基礎的な知識技能の確実</li> </ol>

5 学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字の読み書きは時間が経つと忘れていたり、発表原稿や作文、連絡帳を記入したりする際、平仮名が目立ち活用の面で不十分な児童が多い。</li> <li>説明文の要旨や自分の考えを言葉で表現することに苦手意識がある。</li> <li>東京ベーシックドリルの結果から、「立方体、直方体」において、辺や面の平行、垂直の交わり方の弁別の回答が約4割と苦手意識がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習漢字を使った文章作りを宿題にし、意識的に取り組むことで定着を図る。</li> <li>文末表現や接続詞などに着目する意識は出てきたため、引き続き繰り返し指導する。</li> <li>説明文の読み方では「はじめ・中・おわり」を確認し文章構成を立てさせ、全体を把握する力をつける。</li> <li>立体図形の学習では、実物を実際に使用して、辺や面の交わり方を確認する。</li> </ul>	<p>な習得を目指す。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>毎週の宿題で既習漢字を使って文章を書くことを定期的に行う。</li> <li>短い物語文を宿題に出し、文を読み解く習慣を付ける。</li> <li>設定した字数で要旨を書く場を設定し、添削をくり返し徹底する。</li> </ol> <p>①教科書やタブレットだけでなく実物を見る、触ってみることでより確かな知識をつける。</p>
6 学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和5年度全国学力調査の国語の平均正答率は7割を超えており、その中でも「書くこと」における正答率は全国と比較して高い水準を示している。</li> <li>区の学力調査においては、話すこと・聞くことで区平均より11ポイント低い数値を示した。</li> <li>令和5年度全国学力調査の算数の平均正答率は7割を超えており、その中でも「変化と関係」における正答率は全国と比較して2.3ポイント上回った。</li> <li>「図形」においては、都平均と全国平均を上回っているが5つの領域で苦手意識のある児童が多い。</li> <li>区の学力調査においては、データ活用で区平均より4.7ポイント低い数値を示した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>物語文を「読むこと」の単元では、読む楽しさを追究しながら、作者や登場人物など類似の本を紹介し読書活動の日常化を図り、児童が文章を読む機会を増やしていく。</li> <li>説明文で用いられる図表について、文章と一致する部分を見つける活動を通して、資料の効果について考えられるようにする。</li> <li>社会科や総合的な学習の時間で、資料から読み取ったことについて書いたり、まとめ学習で資料を活用するように計画したりと教科横断的に取り組んでいく。</li> <li>台形や正方形、正三角形の性質、底辺と面積の関係など理解できるように具体物やデジタル教科書を活用して再確認できるようにする。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>学校図書館支援員と協力しながら読書活動を充実させる</li> <li>児童一人ひとりに即した課題の設定</li> <li>ワークシートの工夫</li> <li>教科横断的指導</li> <li>学級での決め事についても子どもたちで話し合わせていく。</li> </ol> <p>①デジタルドリルや具体的教具を用いた指導</p> <p>②毎時間のペア学習やグループ学習の設定</p> <p>③身の回りの事象からアンケートを作成し、データ化させることで気付いたことやどんなことに活かそうか具体的に考えられる問題提起をして取り組ませる。</p>
特 別 支 援		<ul style="list-style-type: none"> <li>課題に集中して取り組み、あきらめずに最後までやり遂げる力を身に付ける。</li> <li>自分の思いや考えを自分なりの表現方法で伝えようとする力を身に付ける。</li> <li>学習で身に着けた力を他の学習や日常生活に生かすことができる。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>一人一人の興味・関心や発達段階に応じた課題を設定する。</li> <li>課題に集中できるよう、環境を設定、調整する。</li> <li>視覚や感覚に訴える教材を作成する。</li> <li>多様な表現活動体験を意図的に計画する。</li> <li>安心して自分を表現できる学級の雰囲気作りをする。</li> <li>日常生活や学習の中でこれまでに身に着けた力を生かして解決していくような課題の設定や問いかけを行う。</li> </ol>

## 学力向上のための重点プラン【小学校】

## 新宿区立柏木小学校

### ■ 効果的なデジタルドリルの活用について【チェックリスト】

【区教委提出用・様式2】

- 学校は年度当初にデジタルドリルの活用について保護者及び児童へ説明をしている。
- 学校は活用の際して、IDやパスワードについて保護者及び児童へ説明をしている。
- 児童及び教員がデジタルドリルの内容や機能について概ね理解している。
- 学校は児童が授業や家庭学習においてデジタルドリルが活用できるよう促している。
- 学校は家庭におけるデジタルドリルの活用について具体的に指導している。
- 学校は全ての学年で定期的に様々な場面でデジタルドリルの課題等を児童に与えている。
- 担任等がデジタルドリルを活用し、児童一人ひとりの傾向を把握し、適した課題や指導を行っている。

## ■ 自校における効果的な学力定着度調査を活用した事後指導について

- Web分析システムSYENを活用し、個々人の具体的な課題を探り、児童の学力や弱点に連動したプリントをWebから出力し、個別の指導に生かしている。
- 問題解決の過程で、学習したことが断片的な学びとにならないよう前時を振り返りながら授業を行うことを1学期から引き続き行っている。既習事項の振り返りは、思考力を伸ばしているので引き続き、行っていく。一方で、同調査の結果から「思考力・判断力・表現力」の項目が、区平均より下回っている。授業で課題の解法の仕方・表し方をタブレットやミニホワイトボードなどを使って個人で、グループで発表する活動を行っていく。
- 同調査の結果、「図形」領域における正答率は、全国を5.9ポイント上回ったものの、区の正答率を1.9ポイント下回っていた。特に、対称の軸を作図する問題の正答率では区や全国を下回るなど、課題が残った。
- 同調査の結果、「データの活用」領域では正答率が区の正答率を上回るなど、タブレット端末活用の成果が一部見られた。一方、習熟の必要な「数と計算」領域では、区の正答率を下回っているため、反復による習熟に課題が見られた。

## ■ 自校における効果的なデジタルドリルの活用について（事前・事後指導を含む）

- わり算については、かけ算九九を苦手と感じている児童がいる。また、文章問題から立式することも難しい。家庭学習（デジタルドリル）で反復練習を引き続きさせている。
- デジタル教材の活用は友達の作品を読もうという意識を高めるには有効だった。一方で、キーボード操作が難しい児童に対しては、キーボード操作の習熟の時間を2学期では確保するようにした。
- 四則計算については、児童の実態に合った計算プリントやデジタルドリルで個別に学習することで自分の目標に向かって意欲的に取り組んでいる。
- ドリルやデジタルドリルを活用してきたが、新宿区学力定着度調査の結果から、「整数の計算」の正答率に大きな差が見られた。引き続き、学習したことを復習できよう家庭学習やプリント、デジタルドリルに取り組みせるようにしている。
- ドリルやデジタルドリルを活用してきたが、同調査の結果から「立体図形」の正答率に大きな差が見られた。既習した学習を掲示物を用いて振り返ったり、映像教材、実物を用いた授業を工夫したりしている。
- 年間を通して行った作文指導では、作文メモに自分が見たこと、聞いたこと、感じたことなどを教師と対話しながら書いている。そこで、タブレットで撮った写真を元に、場面を想起しながら書くことで、文章で表現することへの抵抗が減り、表現力が付いている。
- デジタル教科書や、デジタルドリルを個別の学習に使用したことで、個々の学習の定着度について確認することができた。
- 3学期では、既習学習をしたものをデジタルドリルで自主勉強の課題として出している。
- 新宿区学力定着度調査の結果に基づき、個別にデジタルドリルに紐づけ、個別最適化された課題を出せるようにし、年度末には宿題として出している。